

【書評・紹介】

瀬川 拓郎 著『アイヌの沈黙交易—奇習をめぐる北東アジアと日本』

(東京, 新典社, 2013 年 5 月, 新書判, 127 頁, 800 円+税)

中 村 和 之

表紙画像

本書は、さきにアイヌのコロポックル伝説についての著書を発表した著者が、アイヌの沈黙交易を取りあげた意欲作である。著者によれば、本書は、アイヌの小人（コロポックル）伝説が千島アイヌをモデルとするものであり、中世の『御伽草子』の「御曹子島渡」の影響のもとに 15～16 世紀に成立したことを論じた『コロポックルとはだれか—中世の千島列島とアイヌ伝説』（新典社、2012 年 5 月）の姉妹編をなす。

本書の構成は、以下のようになっている。

アイヌ史の謎をめぐる—プロローグ

I アイヌの沈黙交易

- 1 沈黙交易とはなにか／2 千島アイヌの沈黙交易／3 サハリンアイヌの沈黙交易／4 阿倍比羅夫の沈黙交易

II ケガレと呪術

- 1 千島アイヌのケガレ祓い／2 行進呪術とはなにか／3 陰陽道の影響／4 アイヌの疱瘡神

III 沈黙交易が問いかけるもの

- 1 千島アイヌの沈黙交易と疱瘡神／2 アイヌのリチュアル・ヒストリー—縄文伝統の思想を考える—エピローグ

本書で著者が検討するのは、一般に異文化間の交易方法と理解されている沈黙交易を同族間でおこなっていた千島アイヌの事例である。

まず著者は、千島アイヌの沈黙交易について文献史料の記述を探る。有名なものとしては、新井白石『蝦夷志』（1720 年）があげられるが、このほかにも林子平『蝦夷見聞誌』のエトロフ島の事例があり、地域は不明ながら津村淙庵『譚海』（1795 年）もあることを指摘する。また著者は、アンジェリス（1618 年、1621 年）やカルワーリュ（1620 年）など 17 世紀初頭のジェスイットの宣教師の記録を取りあげ、道東アイヌが千島アイヌから入手する産物や地理的な情報については詳しく語りながら、交易相手である千島アイヌについての情報があいまいである理由として、道東アイヌと千島アイヌが沈黙交易をしていたからではないかと指摘する。一方、成立しなかった沈黙交易として、

1662年にエトロフ島に漂着した船員の口述書を取りあげる。この時エトロフのアイヌは船員の濡れた衣服を持ち去り、獣の皮を船に投げ入れたという。船員たちが皮を返そうとすると、エトロフアイヌは弓で脅して皮を受け取らせた。著者はこのできごとを、エトロフアイヌには沈黙交易をしようとする意図があったが、和人の船員は沈黙交易の習慣を知らなかったために、行き違いが起きたと解釈する。

次に著者は、千島アイヌが沈黙交易を行っていた理由を考察する。著者は元代のペキンの地誌『析津志』にみえる14世のサハリンアイヌの沈黙交易や、『日本書紀』にみえる阿倍比羅夫の沈黙交易の事例を検討する。著者によれば、比羅夫が沈黙交易を行ったわけは、アイヌがその方法を比羅夫に伝えたのであり、アイヌとオホーツク人とは沈黙交易を行っていたのではないかと考えられる。このことから著者は、沈黙交易がオホーツク人をはじめとする北東アジアの先住民の習俗であった可能性を指摘している。

このようにアイヌの沈黙交易の事例を概観すると、同じ文化と言語を共有するアイヌ同士で行われていた点で、千島アイヌの沈黙交易が特殊なものであることが明らかとなる。著者はさらに、千島アイヌに特有な、外からの来訪者に向けてのケガレ払いの習俗に注目し、この習俗が千島アイヌの沈黙交易の謎を解く鍵となるとする。この習俗は、千島アイヌが成立した15世紀以降に成立した習俗であり、著者はこの習俗と陰陽道のへんらい反<sub>ら</sub>い 儀礼との類似に注目して、アイヌの行進呪術が陰陽道の呪術を取り入れて成立したと考える。また疱瘡神に関する観念や呪術は、日本の疱瘡神の習俗との共通性がみられることも指摘する。

このように著者は、疱瘡をはじめとする疫病の流行が、島嶼世界に生きた千島アイヌに、海から襲来する疱瘡への不安や恐れを強く抱かせたのだと推定する。このため、千島アイヌは外部者との接触のない沈黙交易という方法を選択したのであり、これに対して道東のアイヌは、健康な者を選抜してウルップ島に送るなどの配慮をせざるをえなかったとする。そして、アイヌの小人伝説のモデルは千島アイヌであり、この伝説の成立には彼らの沈黙交易の習俗がかかわっていたと結論する。

さらに著者は、アイヌのリチュアル・ヒストリー（祭儀史）について考察を進め、アイヌ語の宗教・儀礼の用語には日本語からの借用が多くみられることを確認する。そして次の三つの波がアイヌ社会に及んだとする。すなわち7世紀後葉から9世紀のエミシ集団の移住の結果、アイヌは古代日本の神道的な宗教・儀礼を受容した。10世紀には陰陽道や修験道の影響があり、13世紀における日本との交流の拡大は、死にまつわるケガレの観念をアイヌ社会にもたらしたと指摘する。ケガレの観念が定着した結果、それくまでのアイヌ社会にあった風葬やミイラづくりの風習は、13世紀を境に絶えてしまい、サハリンアイヌにだけ残ったのだと著者は考えるのである。

その一方で著者は、アイヌのクマ祭りは縄文時代のイノシシの祭りの系譜を引くものと考えられることを指摘する。そして日本の農耕文化の強い影響を受けながらも、アイヌは縄文イデオロギーである動物祭祀を受け継ぎ、文化の中核に据え続けてきたという側面があることを強調して結びとする。

本書は小冊子ではあるが、その議論は多岐に及び、示唆に富む1冊である。評者もアイヌの沈黙交易やミイラ作りについての貧しい論考を發表したことがあるが、著者の見解によって、それぞれの事例が見事に結びつけられるのを読んで、新鮮な驚きを感じ

た。その一方で評者は、著者の見解のなかには今後、文献史料や考古学資料によって検証されていくべき点があるとも思った。一例をあげれば、著者は沈黙交易が北東アジアの風習であったのではないかとするが、評者が読む限りの中国史料では、アムール河流域・サハリン島の諸集団の間で沈黙交易が行われているとの記述は、元代の『析津志』のひとつだけしかない。この点などはどう考えるべきであろうか。

最後に、本書は著者の該博な知識を凝縮した示唆に満ちた著作である。前著『コロポックルとはだれか』とともに、ぜひご一読いただきたい。

(なかむら・かずゆき／函館工業高等専門学校)